

Educo

地球時代の教育情報誌 **エデュコ**

No.20

2009年 秋



2 巻頭インタビュー

俳優・声優

大山のぶ代さん

4 知っておきたい教育 NOW

携帯電話と子どもの人間関係

藤川 大祐

今すべき情報モラル教育
—学校教育でできること—

三田 正巳

8 世界きょういく見聞録

ドイツにおける環境教育・
ESD の取り組みについて

中島 恵理

10 地球となかよしトピックス

スタートからゴールまで
首尾一貫のはぐくみを
武蔵村山市立小中一貫校
村山学園

12 インフォメーション 北から南から

14 地球となかよしゼミナール

「いただきます」

あいさつ —いのちと言葉を交わす—

今村 久二

15 コラム いまどき子ども事情

精神科医とカウンセラー

香山 リカ

16 ほっとな出会い

NPO 法人 ファザーリング・ジャパン代表理事

安藤 哲也さん



お お や ま 大山のぶ代さん（俳優・声優）

きれいな言葉遣いやあいさつ、
伝えられてきたことを
次へ伝えるのが大人の役目です



PROFILE

大山 のぶ代
1936年東京都生まれ。都立三田高校在学中に劇団俳優座養成所に入り、演技を学ぶ。テレビアニメ『ドラえもん』のドラえもん役を1979年から2005年まで26年間演じた。ドラマ「太陽にほえろ！」の脚本執筆や水の研究者としても有名。2007年より音響芸術専門学校校長。

アニメ「ドラえもん」で、ドラえもんの声を26年間務められました。

言葉は大切なんですよ。たくさんの子どもたちがこのアニメを見るんですから。「こんにちは、ほくドラえもんです」というフレーズは、私が考えたんです。最初の録音のとき、台本のどこにも「こんにちは」っていうあいさつがないの。第一回目の放送なのに、これはおかしいと思い、本番のときに初めて「こんにちは、ほくドラえもんです」って言ったんですよ。そうしたら、このあいさつが当たり前になっちゃったんです。

ドラえもんは、必ず「ありがとう」「いただきます」などのあいさつをするんですよ。あれは、私がそういうふうに着て身につけていたからなの。だから例えば、「ごちそうさま」っていうのが台本になかったら、自分で書き加えて言うようにしていたのね。そうすると、どうしても、のび太くんもそうなるわね。そうやって、自然と登場人物みんなが、普通にそういう言葉遣いをするようになっていったのよ。

子どもたちがきちんとした言葉を使うようになるためには、まず大人

たちがきちんとした言葉遣いをしていることが大切だと思うんです。最近、先生や親が、子どもたちと友達感覚で話しているようですが、それは困りますよね。きちんと相手を見て、だれに話しているかというのを意識しないといけない。社会に出ても恥ずかしくないように、きちんとした言葉遣いを身につけられるようにしてほしいですね。

子どものころから個人的な声をお持ちだったそうですね。

自分では全然気がつかなかった

んだけど、「男みたいな声」なんて言われて、先生は出席をとるときに、私が「はい！」って答えると変な顔をされる。そんなことがたびたびあって、だんだん、私の声っておかしいんだと思うようになったんです。中学に入ってから嫌だなあと思う気持ちが続いて、しまいに私は口をきくのが嫌になっちゃって、ずっと黙っているような子になっちゃったの。

あるとき母に、「お母さん、私やっぱり声がおかしいの」と思い切って聞いたのよ。そうすると母が、「人間、

自分の生まれ持っているものは堂々と使わないとダメよ。おかしいなんて思わないで、どんどん自分の声をそのまま使いなさい」と言ってくれたんです。ああ、本当にそうだなと。よし、明日から、どんなに人に笑われようと何を言われようと、私はこの声で通そうと思って。黙っていたら余計だめになると思ったから、その声を平気で使うようになったのよ。そうしているうちに、声を出すのが嫌ではなくなったの。

その後、演劇部に入ったんですよ。演劇部で自分のやりたい芝居をして、男役までいろんな役をやって。堂々と話していたら、逆に男役の声までやれてすごいねなんて尊敬されちゃった。だれも笑う人はいなくなつて、この声でいいんだと思えたんですよ。

人は人、自分は自分とやってくれた親の言葉一つで子どもは元気になるんです。人と違うから目立たないようにしよう、いじめられるから、というのとは、私は違うと思う。今、親や周りの大人が子どもにそう教えているんじゃないですか。「人からこう言われるからやめなさい」なんて年じゅう言われていたら、子ども

は萎縮しちゃう。いじめに限らず子どもの問題はすべて、大人社会の鑑ということですよ。

自分の生まれつき持っているものを恥ずかしがることは全くない。でも、「人様に対して迷惑なことをするのは恥ずかしいことよ」という叱られ方は、よくされていましたね。私の子どものころは、恥ずかしいことをしたと言われるのが一番こたえたんですよ。

今、「人様に迷惑をかけないように」って、あまり意識されないのかもしれない、じゃなくて、人様に迷惑をかけること、恥ずかしいことはしなきゃいけない、っていうのが社会の中の基本だと思えます。

「ドラえもん」の世界では、いろいろな大人が子どもにかかわっていますね。

大人がよその子のことをあまり構わないという今の世の中は不思議ですね。

昔は、学校とか家庭だけではなく、社会全体が、自然と子どもに目を向けている感じでしたね。近所のお年寄りや通りすがりの人でも、そんな

ことしちゃダメよとか、危ないよとか、ひとこと言ってくれた。そういう人たちがいるから親も子も安心できたし、遊びに出かけられたのね。そして、注意されるばかりじゃなくて、温かい目があったんですよ。子どものころ、近所の家に柿がなつていて、ほしいなと思って見ていたんだけど、当然勝手にとっちゃいけない。そのうちに、熟したころ、塀の上にもるで持つていってくださいというように並べて置いてあった。早速かじったら甘くてね。友達みんなが集まって食べて、その家のおばちゃんに向かって「どうもありがとう」って大きな声で言って帰ったの。そんな心遣いを身近で見ているから、大人になって、そういうことを子どもたちにしてあげたいと思うのよね。

大山さんは、13人の大家族で育ったそうですね。

曾祖父父母を初め、祖父母や両親、周りの大人たちの言うことやすることをまねて、自然にいろんなことを覚えていきました。お年寄りほど言葉が丁寧で、それをまねたり、ぬかみその混ぜ方なんかも、祖母や母が

やっているのを見よう見まねで覚えてね。そうやって世代から世代へといろんなことが伝わったの。

私はいつも、「人間の舌を伝えなさい」と言っています。言葉や食べること、大人の使う舌を子どもも使ってほしい。祖母や母が教えてくれたことは、私に伝わっているから、それを次の世代に伝える。その子がまたほかの子にも伝える。悪いものだけ、いいものはいいと、子どものときに私はこういうことを教わりながら大きくなったのよと。

きれいな言葉や目上の人への言葉遣い、あいさつ、そして周りの人への心配り。伝えられてきたことが、ずっと子どもたちへとつながっていく。それが大人の役目なんじゃないかしらと思うんですよ。

■ 著書紹介

ぼく、ドラえもんでした
大山のぶ代 著 1575円 小学館



情報教育

携帯電話と 子どもの人間関係



千葉大学教育学部准教授
藤川 大祐

携帯電話が人間関係に及ぼす影響

子どもの携帯電話利用に関しては、売買春、詐欺、ネットいじめといった犯罪やトラブルを多くの人が思い浮かべるであろう。だが、犯罪やトラブルと言えないところにも、問題がある。

特に、携帯電話が子どもたちの人間関係に及ぼす影響について、注目が必要である。携帯電話の利用は、子どもの人間関係を従来とはかなり異なるものに変えている。

携帯電話を使い始めると、多くの子どもが友人との間でメールのやりとりを行うようになる。典型的には、同じ学校の同性の少数の

友人たちと、毎日10通以上、多ければ数十通から100通以上のメールをやりとりすることになる。

子どもたちは基本的に、メールを受け取ったら数分以内に返信することを当然と考えている。このため、食事中でも勉強中でも一人で考えごとをしているときでも、メールが来たらそれまでやっていたことを中断して返信することになる。就寝中でも近くに携帯電話を置いておき、メールが届いたらいったん起きて返信してまた眠るといったことが多い。風呂場に携帯電話を持ち込む者さえいる。

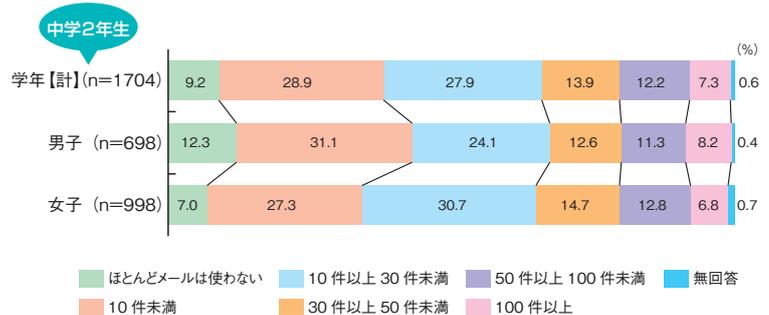
このように、携帯電話を使う子どもたちは、何をしてもゆるやかに友人たちとつながり続けており、一人で何かに継続して向かうことが難しい。思春期であれば孤独の中で自分を見つめる時間も必要であろうが、携帯電話がそうした時間を中断してしまう。これでは、自分がどのような人間かというアイデンティティを確立することが難しくなってしまう。一人で過ごすはずの時間にまで、友人とのつながりが浸食しつつあり、このことが子どもの心理面での成長を妨げることを警戒する必要がある。

「同調圧力」の学校外への拡張

子どもの人間関係を考えるためには、「同調圧力」という概念を視野に入れておくこと



携帯電話を持っている子どもが1日にやりとりしているメールの数



●文部科学省「子どもの携帯電話等の利用に関する調査」2009年5月発表

が重要だ。「同調圧力」は、周囲の者に合わせようとさせる社会的な圧力のことだ。日本の子どもたちの中では、以前からこの「同調圧力」が強かったと考えられる。異なる相手を認めて共生するのではなく、自分たちにはない特徴をもつ者をいじめるなどして排除するということになりやすい。

「同調圧力」の中で子どもが携帯電話を使うようになると、メールのやりとりではひたすら友人に同調し続けることになりがちだ。友人からのメールが届けば、内容に多少の違和感を覚えても、調子を合わせて返信する。

友人が自分をどう思っているかが気になる子どもが多い



友だちとの関係（学校段階別／性別）

	小学生		中学生		高校生	
	男子 (1,581)	女子 (1,553)	男子 (1,686)	女子 (1,597)	男子 (1,720)	女子 (2,072)
友だちの数が多いほうだ	86.2	86.5	80.8	76.2	64.3	64.7
友だち関係に満足している	85.3	82.5	85.7	> 77.7	80.9	82.7
友だちが自分をどう思っているか気になる	56.4	<< 75.6	60.5	<< 73.1	69.7	< 76.4
友だちが悪いことをしたら注意できる	53.0	56.0	55.2	52.7	60.7	< 68.1
男女にかかわらず友だちになれる	41.8	<< 51.9	51.8	< 58.5	51.6	55.1
違う学校に通っている友だちが多い	38.3	37.2	40.0	38.7	64.0	61.2
友だちによく悩みごとを相談する	24.8	<< 47.1	33.8	<< 60.1	40.2	<< 57.8
友だちでもずっと一緒にいたら疲れる	25.4	21.4	28.7	31.2	45.7	46.9

注1)「とてもそう」+「まあそう」の%。

注2) << >> は 10 ポイント以上、< > は 5 ポイント以上の差があることを示す。

注3) () 内はサンプル数。

●ベネッセ教育研究開発センター「子どもの ICT 利用実態調査」2008 年 9 月～ 11 月実施

このようなやりとりを続けることで、学校外でも継続して同調し続けることとなる。
メールで同調し続けることは、たとえ当人に自覚がなくても、大きなストレスとなりうる。相手に違うと思われぬよう気遣い、繰り返し自分の気持ちを偽っていく。何十回同調し続けても、一回同調できなければ友人関係が壊れてしまう恐れがあるのだから、メールを出し続けることは容易ではない。友人を失うことを恐れて同調を続けても、同調するほどに自分でなくてはならないとは感じにくくなり、自分の存在が他の人と交換可能な

のに感じられていく。
根本的には、互いの違いを認め、自分と違う特徴がある相手とだからこそ友人でいたいと思えるようになることが必要だ。だが、違いを認めることは、自分の思いに相手が共感してくれない可能性を受け入れるということである。他者とながらぬ孤独な状態でも自分は大丈夫だという自信がなければ、友人と同調し続けるという選択肢を選んでもしょうである。たとえ互いに違っても受け入れられることでこそ、簡単には崩れない友人関係を築くことができるはずなのであるが。

居場所としてのネットの可能性

携帯電話を使う子どもたちの中には、周囲の友人とのメールのやりとりにとどまらず、自分のホームページ等を公開したり、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）会員制の交流サイトに参加したりして、ネット上での交流を広げている者も多い。もとの友人どうしで互いの発信を見合うようなこともあるが、学校とは異なる人間関係がつけられることもある。

「モバゲータウン」のような子どもに人気の高い SNS の様子を

見ると、多くの利用者にとって SNS が貴重な居場所になっていることがうかがえる。こうした SNS には、学校の成績の悩みや友人関係の悩み等、学校では話題にしにくいことを書くやりとりが見られる。学校の人間関係のしがらみの中では自由に発言できないことがあり、他にもそうした話題を交流する場所がない子どもたちが、SNS で交流し、励まし合っていると考えられる。

地域で隣近所の人間関係が希薄になり、子どもたちは学校や家庭とは異なる居場所をもちづらい。学校の人間関係のもつ意味が大きくなりすぎ、学校でうまくいかないと救いがないということになりかねない。学校以外にも居場所があることで、学校でも余裕をもって自分を出し、学校の友人たちとも適度な距離を保てる可能性がある。

もちろん、学校以外の居場所がネットにしかないというのは、望ましい状態ではない。地域にもネットにも多様な居場所候補があるほうが、当然望ましい。地域に十分な居場所が確保されていない現状では、ネットが子どもの居場所になる可能性も追求していく必要がある。どのような子どもがどんなふうになら、ネット上の人間関係を必要としているのかということにも、注目していきたい。

●藤川大祐

授業づくりと教育研究のページ

<http://homepage2.nifty.com/dfujikawa/>

情報教育

今すべき情報モラル教育 —学校教育でできること—



岩手県立総合教育センター
研修指導主事
三田 正巳

子どもたちをとりまく環境

「ポケベル（ポケットベル）」を手にした生徒たちが休み時間に学校内の公衆電話前に並んでいる光景、それは今から十数年ほど前。それから数年後、「先生。うちの娘、先月の携帯電話の請求が5万円なんですよー」。これは私が高等学校に勤務していたときに保護者から受けた切実な相談である。そして今、子どもたちが「ケータイ（携帯電話）」を使っている姿といえば、目の前にかざして必死に

文字入力をしている姿だ。通話している姿はほとんど見かけない。時代の流行が学校現場に入り込み、生徒指導上の問題もその流行に大きく影響されてきたのは事実である。

情報社会となった現在、コンピュータのみならず携帯電話等からも簡単にインターネット接続できる通信環境が整ったことにより、接続ツールとしての携帯電話利用がコンピュータを上回る勢いである。これは、まさに身近に携帯していることによる手軽さや高機能化による大ききであろう。

「子どもの携帯電話等の利用に関する調査（文部科学省H21・5）」によると、「携帯電話による1日平均のメール送受信件数」で、「50件以上」と回答した割合は小6で2・4%、高2にいたっては41・3%であり、「プロフの公開経験」も「したことがある」が高2で44・3%と報告されている。

「ケータイ依存症」と言われるほど、子どもたちの中に携帯電話利用が深く浸透してきており、その依存度が生活状況に顕著に表れている。そして食事・トイレ・入浴と片時もケータイを離すことなく、友達関係を維持するためのツールとしては必須であることが浮き彫りになっている。

さらにインターネットという基盤上で提供されるサービスも多種多様になり、誹謗中傷を「掲示板」などへ書き込むことによる「ネットいじめ」、「自己紹介サイト」への「個人情報



岩手総合教育センター開発の教材「プロフィールサイト」を用いた情報モラルの授業

報の掲載」、「出会い系サイト」に代表される「有害サイトへの誘導」など、大人や子どもを問わず、そのサービス特有のトラブルと背中合わせで利用している現状にある。

情報モラル教育の役割

特に子どもたちは、安易な利用、興味本位の利用、友人との付き合いに歩調を合わせるための本意ではない利用などにより、被害者や加害者となり得る場合がある。

情報通信機器は日々進化しており、それにより提供されているサービスも同様である。学校教育においては、その便利な機能の裏に潜んでいる「危険性」について理解を深める

ことも一つの側面として捉えながら、変化の激しい情報通信環境に柔軟に対応できる力を育てていかななくてはならない。

インターネット

という不特定多数の人が利用する環境下で、より安心して利用するためには組織的な取り組みが必要である。例えば、国レベルの「法による規制」、企業レベルの「フィルタリング等による制限」、そして学校・家庭レベルの「情報モラル教育」である。

現在、情報通信ネットワーク等を利用した犯罪が数多く報道されており、子どもたちもインターネットや携帯電話の危険性は少なからず認識している。しかし、具体的にどのような行動が危険に直結するのかについての理解は不足している。

このような状況に対応するため、平成20年3月に告示された「学習指導要領」では「情報モラル」指導がより明確に位置づけられた。

岩手のアプローチ

「情報モラル」に関する指導はすでにこれまで数多く実践されてきている。しかし、年々



トラブル件数が増加しているという状況を踏まえ、従来の指導に加え、より一層の充実を図る指導展開が必要であると考えた。

そこで、岩手では平成18年に「体験」をキーワードにして、体験型教材『情報サイト』の開発と指導法を確立して授業や研修会の実践を継続してきた。指導上の配慮事項としてインターネット上の実際のページやサービスを利用して授業や研修会に活用することは避け、コンピュータ室内でのみ利用できる教材『情報サイト』を設置し利用することを考えた。いわゆる「安全」な環境のもとに「危険」な体験をすることを、あえて授業や研修会に取り入れた。

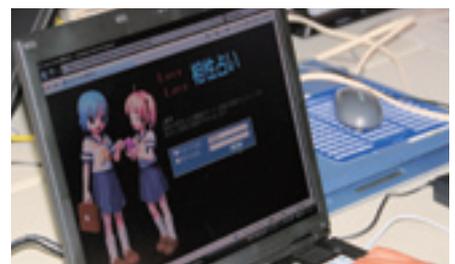
この教材には、有害サイト・掲示板・チャット・占いサイト・ネットショッピング・ネットオークション・アンケートなど、実際にインターネット上で遭遇するページやサービスが再現されており、実際のものと同様の動作をするものである。

例えば、授業の導入で「占いサイト」を自由に子どもたちに利用させる。このサイト内には「姓名占い」「星座占い」「電話番号占い」などが含まれている。その後、指導者から、実は入力されたデータが保存されており、データの一覧表を提示する旨を告げると、子どもたちから「先生ー、やめてー」というような声がある。いかに正直に自分の個人情報を入力していたかがえる。この場面では

個人情報を自ら流出させていたことに気づかせ、ネット上の個人情報の扱いについて振り返りをさせるものである。

「みなさん、個人情報の取り扱いには十分気を付けましょう」というメッセージによる指導に加えて、このような体験を行うことでより正しく、深い理解が得られている。

岩手では、これらの教材を使ってインターネットの危険から回避する方法などを学んだ児童・生徒・教員・保護者は1万5千人を超えている。そして、「体験」をとおした「情報モラル教育」の大切さを実感しているところであり、今後も取り組みを継続して推進していきたい。



教材『情報サイト』内の「占いサイト」。個人情報流出の危険性を実感できる

●岩手県立総合教育センター開発

教材システム『情報サイト』

http://www.t.i.wate-ed.jp/tantou/joho/moral/joho_site/index.html

「情報サイト」は、校内（実習室）のサーバにインストールして利用することができ、生徒機（クライアント）へ設定する必要はありません。生徒側の各コンピュータからアクセスして利用できる他、無線LAN対応携帯電話システムと組み合わせることで携帯電話から利用することも可能です。

世界 きょういく 見聞録



Vol.7 FROM GERMANY



世界には、さまざまな学びのかたちやプロセスがあります。今回は、環境先進国といわれるドイツの環境教育の実践を紹介します。

ドイツにおける環境教育・ESD の取り組みについて

ドイツでは、ヨーロッパの中でも環境先進国としてさまざまな先進的な施策が展開されている。それを後押ししているものは、国民の環境保全に対する高い意識である。ドイツは、かねてより、国民の高い環境意識を支え



る環境教育・ESD (Education for Sustainable Development) に取り組んでいる。また、ドイツは、日本の提案により始まった、2005年から2014年までの「国連持続可能な開発のための教育の10年 (United Nations Decade of Education for Sustainable Development: UNDESD)」に、世界で最も熱心に取り組んでいる国の一つでもある。

環境省総合環境政策局環境教育推進室室長補佐 中島 恵理

ドイツにおける環境教育の取り組み

筆者は、今年3月末から4月初頭にかけてドイツのボンで開催されたESDの世界会議（国連持続可能な開発のための教育の10年の中間評価を行う国際会議）に参加した。その会議の一環として、会議の参加者によるドイツの環境教育やESDの取り組みの現場視察が行われ、筆者は、その中でも学校における環境教育の実践現場の視察ツアーに参加した。

ドイツでは、学校の子どもの参加により省エネ活動を実施し、削減された光熱費の半額を学校の活動に活用できるという「50/50（フィフティ・フィフティ）プロジェクト」が普及している。

エミールハイマン中学校における50/50プロジェクト

筆者が訪れたボン市のエミールハイマン中学校は、先進的な50/50プロジェクトの活動を展開している学校である。



エミールハイマン中学校外観

エミールハイマン中学校での活動は、1996年、ドイツの他の地域での50/50プロジェクトの取り組み

を知ったヘイマン中学校の生徒が、50/50プロジェクトの実施を学校側に提案したことから始まる。生徒からの提案を受けた学校がボン市にプロジェクトの制度化を要求し、ボン市は費用対効果の高い事業として採択することとなった。1997年よりヘイマン中学校においてプロジェクトを開始し、事業開始前と比較して、ガス使用量33%、電気使用量70%削減を実現したという。

ヘイマン中学校では、事業の実施のため、課外クラブの一つとして環境クラブを設置し、このクラブの生徒が50/50プロジェクト実施のイニシアティブをとることとなった。クラブの生徒は、1週間に1度集まり、地球温暖化の仕組みについて学ぶ。そして、地球温暖化を防ぐために生徒たちができることのアイディアを出し合う。

また、各クラスに2人のプロジェクト担当が選出される。プロジェクト担当は、環境クラブの生徒たちから、CO₂削減のための活動や行動について指導を受ける。学校における省エネルギー・省資源の取り組みはすべての生徒が参加して行うが、クラスのプロジェクト担当は、きちんと取り組みが行われているかチェックする役割を担っている。そして、プロジェクトの成果であるエネルギー使用量の削減等

の分析、評価も子どもたちが自ら行う。

50/50 プロジェクトの成果

50/50 プロジェクトにより得た資金は、ハイマン中学校では、太陽光発電設備、環境教育の教材、木造の瞑想ハウス（学校の中での生徒間の喧嘩、いじめ等を解決する場として活用されている）の設置等に活用されているという。筆者が、校長先生にプロジェクトの意義について伺ったところ、「本プロジェクトは、学校における環境教育、環境保全活動の実践といった側面に加え、活動の結果としての生徒の学力向上やリーダーシップ力の向上、いじめや暴力撲滅等の多面的な意義がある」として、活動を非常に高く評価していた。

また、ハイマン中学校の取り組みは、ボン市、またはドイツ国内での環境・ESD にかかるコンテスト等での表彰を受けているほか、ドイツの「国連持続可能な開発のための教育の10年」公式プロジェクトとして認定されている。また、海外の学校（ハンガリー、ウズベキスタン）への普及を図るため、生徒間の交流も行われているほか、今後は上海万博での活動報告も予定されている。

環境クラブは、最初は子どもたちにあまり人気がなかったが、上記のような形で自らの活動を子どもたちが紹介し、表彰される機会が増えるにつれ、モチベーションが高まり、現在では最も人気のあるクラブであるという。また、当初、学校の先生たちのあいだには、電気を節約すると暗闇の中で教えることになるのか等の懸念の声もあった。しかし、プロジェクトを展開していくうちに、本事業の意義を理解し、積極的に協力するようになった。また、活動の展開にあたっては周辺の大学（大学の学生が先生として活躍）や企業（太陽光発電施設関係）とも有機的な連携を図っている。

筆者が参加した視察ツアーでは、四つのテーマ（地球温暖化、再生可能エネルギー、廃棄物削減、暴力を防ぐ）でグループ分けを行い、環境クラブの生徒と会議参加者が共にワークショップを実施した。

筆者は地球温暖化のグループに参加したが、そこでは、生徒から気候変動の原因や影響についてプレ

ゼンテーションを聞き、その上で、生徒と一緒に地球温暖化について意見交換を行った。印象的だったのは、どの学生も生き生きと、



ESD 世界会議参加者とエミールハイマン中学校の生徒とのやりとり

温暖化について自分たちが学んだこと、実践していることを外国人の筆者に対し積極的に話しかけてくれたことである。そして、環境クラブでの活動が、彼らにとって楽しく有意義であるということを実感させてくれる視察であった。

日本におけるESDの取り組み

我が国の環境省においても、学校の中における環境負荷削減を進めるため、50/50 プロジェクトと同種の事業として、「クールアーススクール事業（下記参照）」を今年度から展開することとしている。クールアーススクール事業がドイツの50/50 プロジェクトのように、生徒、先生、学校が一体となって楽しみながら、そして子どもたちの環境力、社会性向上、そして学力向上につながる事業として展開されることを期待している。

環境省

環境教育・環境学習・環境保全活動のページ
<http://www.env.go.jp/policy/edu/>

●クールアーススクール事業●

2008年7月に策定された低炭素社会づくり行動計画等において「学校教育における低炭素社会づくり等のための具体的手法を学び実践する取組の充実」が盛り込まれたこと等を踏まえ、学校教育の中で、各教科や総合的学習の時間、委員会活動やクラブ活動等の学校教育のあらゆる過程、場面において、CO₂削減を中心とした環境保全のための学び及び実践を全国の学校で普及を促す。この学びを通じて、2050年に向けた低炭素社会づくりを担う人材育成を目指すとともに、学校活動全体におけるCO₂等の環境負荷の削減を推進する。



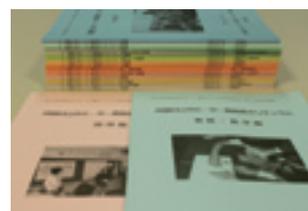
▲小学6年の算数の授業。2クラスを三つの学習コースに分け、習熟度別少人数授業を行っています。「発展コース」では、中学校の先生から、中学で習う範囲と関連つけた授業がプラスされました。他にも、理科の実験など、中学の先生の専門知識や技能を生かした授業を行っています。各教科でもさまざまな協力授業パターンを研究中。小学校の先生が中学校でどのように教えるかも、今後、検討を重ねる予定。

東京都武蔵村山市立小中一貫校 村山学園 スタートからゴールまで 首尾一貫のはぐくみを

武蔵村山市立第四小学校（320名、小林政雄校長）と第二中学校（140名、橋本和博校長）は、2010年4月より、隣接していた両校の校舎をつなぎ、完全な施設一体化型の一貫校「村山学園」となります。先生たちは、小中一体となって子どもたちをはぐくもうと、意欲を新たにしています。

「連携」とはなく「一貫」

第四小の小林校長先生は、「連携」と「一貫」の違いについて、こう説明します。「連携」は、あくまでも別個の組織が協力・連絡してある目的を共有しようとするものです。だから、相手の領域に「口出し」をし始めると連携は崩れてしまいます。しかし、「一貫」は、初めから終わりまで一つのやり方を曲げず、組織が一体となって一つの目的に向かっていくということを意味します。あえて相手の領域に踏み込まないと一体化はできないということなのです。義務教育のスタートからゴールまで、まさに「首尾一貫」で、一体となって子どもをはぐくむ。小学校の



16の部会ごとに市内全小・中学校の先生が協力し、大学の先生等の指導を受けて作成したカリキュラム。

6年修了後に中学校へ受け渡して終わりではない。中学校も、小学校から受け取るだけではない。「同じゴールを目指す一つの組織体として、小中の先生が一緒に生活する施設一体型の一貫校は、指導観の一貫という意味でも大きな意義をもつと思います」と校長先生は力強く語りました。

小中の教員の密な交流

以前は、年に1回授業を見合う交流があるだけでした。そのため、一貫化に当たっては、先生たちにはかなり不安も感じられたとのこと。そこで、第四小と第二中では、昨年度から、互いの授業を見合う機会をとにかく増やし、今年度は、2週または

▶算数「習熟コース」では、中学校の国語の先生がTT（授業補助）として参加。専門外の教科での子どもたちの様子や、小学校的な授業手法を見ることにより、児童理解を深め、7年生（中1）とのスムーズな接続を目指します。

▼小・中の先生たちが同じ空間で過ごす、新しい職員室。9学年すべての子どもたちが、ここを訪れることになります。来年度からは、校長先生1人、副校長先生が3人（予定）の新体制がスタートします。



▲中学の先生の授業を真剣な目つきで聞く「発展コース」の6年生。中学校での学習に、興味と期待が高まります。

●武蔵村山市立小中一貫校 村山学園
（第四小・第二中） 研究発表会
2009年11月6日（金）
—施設一体型小中一貫校開校に向けて—
<http://musashimurayama.ed.jp/mmoeds/index.html>



1週に1時間の協力授業（TT）を実施。その中で、互いの「実態」を見ることができ、一貫校としてのカリキュラム作成に当たって、何をすべきか見えてきたといえます。

例えば、小学校では、発達の段階を考慮し、念には念を入れて教材等の準備をして授業に臨まないと、子どもたちが本当に動けないということ。中学校は、授業に当たり生徒の「学習する」姿勢、すなわち授業規律と意欲が確立されているのが大前提だということ。小学校の場合には、子どもの関心をどう授業に向けるかに重点を置くが、中学校では、授業時間内にどれだけ学習でき、深めるかに重きを置くということです。

頻繁に授業を見合う中で、いわゆる「中1ギャップ」の要因の一つが実感として見え始めました。中学校に上がったといっても、すべての子どもが学習の態勢をつくってきているわけではなく、小学校のような導入手法をどう取り入れられるかという視点を持つ必要がある。小学校でも高学年では、中学校のような学習システムにも重点を置き、授業の進め方をスムーズに移行させ、子どもに慣れさせる必要がある等々。

また、中学校では、中3の終わりには必ず高校入試があり、卒業後の生徒の生き方を考えなければならぬという意識が常にあります。しかし、小学校では、義務教育の終わりに高校受験が存在するということを、授業の中で意識することはあまりない。そのことが、小・中の授業のあり方の違いに現れていたということに双方が改めて気づいたといえます。

第二中の橋本校長先生は「義務教育9年間の連続性や系統性が、学習効果の上昇につながるのではないかとということが見え始めた。それが先生たちの今後の期待感につながっているんですよ」と熱く話しました。

「教科教育」の専門性を高めたい

双方の校長先生は、口を揃えてこう言いました。「教科教育の専門性」を小中両方でつくり上げ、高めるという意識が必要です。

専門教科の知識偏重になることなく、また、子どもの興味を引くテクニクのみでこだわることなく、小中互いの持ち味を生かした授業展開の研究をこれからさらに深めたい。今後の「一貫」体制に向け、先生たちのやる気も高まっています。

大阪府

自分発見・ひと発見・未来発見 大阪府内公立学校初の施設一体型小中一貫校としての歩み

◆ 箕面市立とどろみの森学園校長

奥谷 俊彦

平成20年(2008年)4月、箕面市立止々呂美小・中学校は箕面森町に新築移転し、大阪府の公立学校で初めてとなる施設一体型小中一貫校、愛称「とどろみの森学園」として新たなスタートを迎えました。

新しい2階建ての校舎は、コンクリート打ち放しのガラスを多用した、斬新なデザインとなっています。また、特別教室を1階、普通教室を2階に配置するとともに、2階のデスクスペース等を通じて、小・中の子どもが自然に交流できるような設計されています。さらに、校舎内の各所に子どもそれぞれの居場所や学習の場所となるよう、可変性に富む空間が準備され、教育実践の創造性が求められています。

さて、小・中の段差を解消すべく小・中の9年間を、小4までの前期、中1までの中期、それ以後の後期とし、それぞれの発達段階に応じた各教科のカリキュラムづくりを、小・中の授業観・指導観の統一を図りながら行っています。中期には中学校の教員も含んだ教科担任制を一部の教科には実施しています。

さらに、異年齢交流を促進すべく各行事や日常活動等の工夫を凝らしています。

ところで、本校は文部科学省の研究開発学



校の指定を受け、「コミュニケーション科・英語活動科・とどろみタイム」の新教科を開発すべく研究活動に取り組んでいます。

平成22年(2010年)1月27日(水)に中間報告会を実施する予定にしていますので、多数の教職員の方々の参加をお待ちしています。

●とどろみの森学園ホームページ

<http://cms-p01.teacher.ne.jp/todoromi/>

INFORMATION

北から

全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。



だけでなく、近隣の教育委員会や小中学校、幼稚園、保育園にも配り、生活習慣を改善することの大切さをより広く呼びかけることができました。

自分が好きで取り組んできた「歌」で子どもたちを救うことができればこれ以上の喜びはない。この歌の力で生活リズムが崩れがちな子どもたちが減少し、学校での学びが確かなものになることを願うばかりである。

長崎県

歌で広げる 「早ね・早おき、朝ごはん」

◆ 波佐見町立南小学校校長

宮崎 浩郁

子どもたちの生活習慣が学校教育に与える影響は大きい。本校でも生活リズムが乱れることで体や心の不調を訴える子どもが増えてきたため、合い言葉を「早ね・早おき、しっかり朝ごはん」とし、児童の生活習慣改善をめざす「くらし力向上プロジェクト」に取り組んできた。その啓発活動のひとつとして、同僚のN先生と共同で作上げたのがキャンペーンソング「早ね・早おき、しっかり朝ごはん」である。

歌には人を動かす力がある。家庭で日々実践すべきことを歌で伝え、子どもたちの生活習慣を改善したいと考えた歌詞には、早寝、早起き、朝ごはんのそれぞれの場面で実践してほしいことを盛り込んだ。

一番には、窓を開けさわやかな空気を部屋の中に入れ、元気におはようと起きる朝の様子を。二番には、炊きたてのご飯と野菜たっぷりのみそ汁でおいしくいただく朝ごはんを。そして三番には、学校から帰った後の家族の団らんと早寝の大切さを。メロディーやリズムは子どもにも親しみやすい軽快なものになるよう心がけた。

できあがったCDは本校の全家庭に配布す

『音読』で人間形成と学力アップ

言葉を磨き、思考力・表現力を培う取り組み

流山市立新川小学校校長 坂本みどり

と「百人一首」だそうです。また、6年生は、朝会で発表した「論語」が大好きだそうです。

流山市は全学校で、音読がたいへん盛んです。流山市教育委員会の指導主事や教師たちが集まって作成した、市独自の音読副読本『音読ながれやま（著作権許諾済）』には、詩・古典（俳句・百人一首・平家物語・枕草子等）・名作童話の一節、さらには流山市在住の作家による地域の童話等、音読にふさわしい素晴らしい作品が数多く集められています。今年で4年目を迎える、年1回の市をあげての『音読・朗読発表会』には、多くの学校が参加しますが、どの学校も毎年、学校独自の個性を生かした取り組みを発表します。

まさに、音読の響く流山市です。



「祇園精舎の鐘の声……（平家物語）」—— 今日古典や現代詩など、様々なジャンルに意欲的に取り組む子どもたちの大きな声が廊下にまで響き渡っています。新川小の朝の音読タイムの始まりです。本校では、「豊かな人間性」と「次代を切り拓く力」を合わせ持った子どもたちを育てるために、『人間としての基盤づくり』として、音読を教育ビジョンの柱に位置付けています。そして、子どもたちはこの音読により、集中力や豊かな感性を身に付けていっています。

「人間としての基盤づくりを大事にしていけば、人としての成長と共に、必ず学力は伸びてくる」という考えのもと、実践を重ねて3年になります。その結果子どもたちに、ことばを大切にす意識や思考力・表現力が培われ、学力テスト（国語・算数）の結果にも、かなりの成果が表れるようになってきました。ちなみに、様々な古典に積極的に挑戦している2年生の好きな音読教材は、「平家物語」

南から



植田東小学校は、平成21年4月に開校した、名古屋市で263番目の小学校です。植田小学校、植田南小学校の児童数増加に伴い、分離新設校として、750名の児童、44名の教職員でスタートしました。

本校は「木のぬくもりに囲まれた学校」として、教室の床や壁面に木材を多用した温かみのある空間づくりがなされています。子どもたちの机・イスも木製で、3段階調節可能です。中庭のウッドデッキや1・2階のワークスペースにあるデン（隠れ家的スペース）は子どもたちの楽しい語らいの場になっています。各教室前にはワークスペースが設けられ、教室と一体化した広い空間での授業が可能になっています。また、太陽光発電装置の設置、雨水をトイレの洗浄水に利用するシステム、教材園を含む屋上緑化など環境への配慮もなされています。校庭の一角には、江戸時代の長屋門が復元移築され、歴史とのふれあいの場となっています。

教育目標を「ひろい心 がんばる心 しなやかな心」とし、育てたい子ども像を、「広く知識を吸収し、進んで学習に取り組む子ども」「健康や安全に留意しながら、粘り強く運動に励む子ども」「時と場、相手の気持ちを考えて前向きに行動する子ども」ととらえています。今年度は学校努力点目標を「つながろう、そして深めよう」とし、児童の学び合い学習、学校と学区のつながりを深める学習、復元設置された江戸時代の長屋門を題材とした歴史学習を通して、人・地域・歴史とのふれあいを大切にする児童を育成したいと考えています。また、学年ペア活動（1年と3年、2年と5年、4年と6年）を通して、総合的な学習の時間を中心に、異学年とのふれあい活動を重視しています。



木のぬくもりに囲まれ、人、自然、歴史とのふれあいを大切に

名古屋市立植田東小学校校長 矢野博明

地球となかよし ゼミナール

子どもたちのメッセージに学ぶ

教育に関するキーワードをクローズアップする「地球となかよしゼミナール」。「地球となかよしメッセージ」に寄せられた子どもたちの思いから、現代のさまざまな問題を考えます。今回は、2008年の応募作品から、いのちを尊ぶところについて取り上げます。

「いただきます」
あいさつ——いのちと言葉を交わす——



秀明大学教授
前東京都品川区立品川小学校校長
今村久二



おいしい お米へ

● 森山 由未
新潟県 川口町立川口中学校 2年
私は、お米が大好きです。なぜなら、おいしくて、どんな、おかずにも、合うからです。しかし、そのお米は今、事故米として、世間で問題になっています。私が、食べているお米は、自分の家で作っているものなので、安全です。しかし、何も知らずに、事故米を食べてしまった人もいます。そのような問題を、二度と起こさないでほしいと思います。今後、私の大好きなお米で、問題が、起きないことを願っています。



ありがとう

● 柿谷 大星
富山県 氷見市立朝日丘小学校 6年
牧場に行って牛のフジコちゃんの乳しぼりをした。牛乳ができるまでの話を聞いた。最後に牧場の人が、「お乳が出なくなった牛は、みんなが食べているお肉になります。」って言った。ぼくはびっくりして悲しくなった。でも話を聞いてよく分かった。ぼくたちが生きていくためにはほかの生き物たちの命をもらわないとだめなんだ。だから、「ありがとう。」と思いながら、残さず食べるんだ。

温暖化をはじめ、地球環境の課題は、サミットの主要議題となるようなグローバルな視点からローカルなわたしたちの暮らし方まで多様な対応を求めています。科学の進展の未来予測が明るい展望だった半世紀前と比べると、結果的に予測不能だった社会が到来していることを実感させます。

一つには、都市化などによって「食」にかかわる生産と消費の距離が見えないほど遠ざかったというところがあるのではないのでしょうか。森山由未さんが写した、稲の豊かな実りは、大好きなお米の、いのちの重さが確かな量感を持って訴えてきます。由未さんがこの重さを写しに出かけたのは、身勝手な利己主義が引き起こした事故米の事件を知ったからです。

し、結果論としてのトレーサビリティは、生産と消費との距離を埋めるものではありません。柿谷大星さんが牧場の人の話から、食肉という他の生物の「いのちをいただく」という「生」の真実にまで思いを深めた作品。この思いが生まれたのは、牛のフジコちゃんの血の通った乳房の暖かさややさしい生命としての母性に、乳しぼりを通して直接触れたからに他なりません。

私たちの生活で消費するものや、その「もの」になるまでの、手をかけられた時間のすべて（にかかわったあらゆるものや人）との距離をつなぐのにはやはり「ことば」です。「いただきます」「ごちそうさま」ありがとうのような、生命や供与にかかわるすべてへの感謝のあいさつは、直訳できる外国語が見当たらないそうです。わたしたちのなにげない多くのあいさつの中には、自然と人、人と人の、空間や時間の距離を縮めます。予測できる社会、わかり合える「かかわり」のために子どもたちに、「いのち」への共感をはぐくむ母語の要として、あいさつの心を伝え続けたいものです。

精神科医とカウンセラー



香山 リカ
(精神科医・立教大学教授)

私は、実は「臨床心理士」の資格も持っている。心理系の大学院で教えるときに、一念発起して受験したのだ。

勉強をしながらひとつ感じたことは、「精神科医の仕事と臨床心理士の仕事は、似て非なるものなのだ」ということ。もちろん、心理療法については臨床心理士のほうがずっとくわしく学ぶのだが、身体疾患と精神症状の関係、薬の種類や使い方などいわゆる医学的な知識について、臨床心理士が学ぶ機会が少ないのだ。

学校現場で子どもたちに生じるいろいろな問題は、それが“心”由来なのか、“からだ”由来なのか、はたまた友だち関係や家族に原因があるのか、本人さえもわからない、という場合が少なくない。以前、私が受け持った子どもにも、親も先生も長いあいだ「いじめによる不登校」だと思っていたが結局は脳波異常を呈するからだの

病気だった、というケースがあった。その子どもの場合、短時間の意識消失といった症状も出ていたのだが、いったん「いじめで心が傷ついたんだ」と思い込んでしまうと、まわりの大人はなんでもそれが原因に見えてしまう。しかも、大人なら頭痛やめまいといった症状をはっきり訴えることもできるが、子どもの場合は「いじめが気になってるのね?」と強く言われると、それ以上、何も言えずに「うん」とうなずくばかり。

だからスクールカウンセラーは、大人相手のカウンセラー以上にしっかりした医学的知識を持って、「この子が元気ないのは、本当に心の問題? もしかすると、からだの病気や薬が必要な精神疾患

が隠れているのでは?」と疑い、見抜く力が必要だ。ちょっとでも「これはあやしい」と思ったときには、積極的に専門医に尋ねたり受診させたりする潔さも欠かせない。「もし異常なしだったら恥ずかしいし…」などといったためらいは、不幸な結果につながることもある。

もちろん、精神科医や小児科医も、そういったスクールカウンセラーからの照会に快く応じなければならぬ。「忙しいから学校からの問い合わせにはちょっと」などと断るなど、言語道断。カウンセラーと医師、両者の連携プレーがなければ、子どもを見守ることはできないことを、誰もが自覚すべきだろう。



地球となかよし メッセージ 2009

作品発表のおしらせ

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真やイラストにメッセージをつけて表現する「地球となかよしメッセージ」。今年度も、続々とすばらしい作品が届いています。



「地球となかよしメッセージ2009」入賞作品は『Educo』2010年冬号(2010年1月下旬発行予定)で発表します!

昨年度の入賞作品は、教育出版ホームページでごらんいただけます。
(『Educo』バックナンバー、「地球となかよしメッセージ2008作品集」についてはお問い合わせください。)



ほっとな 出会い

NPO法人

ファザーリング・ジャパン代表理事

安藤

哲也さん



●お父さんも子育てにかかわる権利がある

父親が学校や地域にかかわることが少ないのは日本特有の現象で、欧米などでは普通に父親が学校や地域の活動をしています。PTAや地域に限らず、家庭でも父親の影が薄いんですね。乳幼児期に子どもとのベータシットラスト（信頼関係）を築いている家庭は、成長して多少の問題が起きても大丈夫。また、思春期には、お父さんは生きるロールモデルになるわけです。でも、仕事で忙しいからと家に全然いない。社会のルールや地域の文化であるとか、本来そういうものを伝えていく役割があるのに、子どもが父親から何も学べていないんですよ。家計を満たすだけで父親の役目を果たしていると考えるのは大まちがい。だから、お父さんたちが生き方とか仕事観とか価値観を変えないと。

子育ては義務じゃなくて、楽しい権利。その権利を、長時間労働が当然になってきている今の企業中心社会に剥奪されている。僕は父親支援をやっていますが、決して育児をしないお父さんを責めているわけではない。彼らだってやりたいのになんか環境にあるだけ。だから、働き方を変えて父親が家に帰れる社会の仕組みを考えようという活動に取り組んでいるんです。

●しつけや道徳教育は本来家庭のしごと

基本的なしつけや道徳観の育成などを学校に求める親がふえ、また学校もそれに応えようと

していると聞きますが、それは本来、学校の役目ではないと僕は思う。家庭で、食べる・寝るを普通にやって、おはよう、いただきますといった挨拶ができていればいい話だと思うんですが、それが親の長時間労働などで叶わず家族が空中分解していきませんか。毎日親が子どもたちと食卓を囲めれば、自然に子どもたちもマナーを学ぶし、食べることに興味が湧くはず。それがその家のルールになっていけば従うわけです。基本的な人間の営みを取り戻せばいいんです。子どもを直すというより、まずは親が変わり、進歩するべき。大人たちは拝金主義やブランド志向といった偏った価値観やライフスタイルを見直すこと。そして社会全体で子育てしながら働きやすい環境づくりをしていけば、おのずと子どもはよくなっていくと僕は考えています。

●悪者さがしではなく、建設的な議論を

PTA会長を務めていたときに、学校が決めたことに対して、親たちの間で学校を非難するメールが流れたことがあります。親たちは間の情報なくして結果だけ見る。学校は経緯の説明という手続きを省いてしまう。これでは信頼関係は築けません。それで僕は、ちゃんと臨時保護者会をやって問題を解決しましょうよと双方に提案したんです。子どもが学ぶ環境をよりよくするという共通の目標の下に、大人たちが建設的に議論をすればいいわけです。そういう

う視点でPTAには足りないと思うんです。すぐに犯人さがし、悪者さがしになるのが今の社会の問題点。活動に参加しない人を責めたり、保護者が学校を責めたりしても何も生まない。育児をしない父親が悪い、しつけをしない親が悪い、という論調も同じ。個人を責めるのではなくて、構造的な問題をどう変えていくかということに、知恵を出し合えばいいんです。みんなで話し合っって課題を解決していく大人の姿こそ、子どもたちに見せたいものなんです。

●子どもは大人の生き方を見ている

僕は先生たちに、一人の魅力的な大人として教壇に立つてほしい、それだけです。大事なことは、長い時間、一緒にいる大人がかっこいいかどうかなんです。だから僕は、先生たちもいつまでも残業してないで、さっさと帰ってくださいと。自分の生活を充実させて、翌日いい顔で子どもたちに会ってほしい。今、将来子どもがなりたいたいのは、ファストフード店やティッシュ配りのお姉さんなんて話もあるんです。いつも笑顔だからって。先生が疲れた顔ばかりしていると、将来、教師になりたいという子もいなくなりますよ。

単純作業なら、僕ら保護者がやります。先生は先生の本来やるべき仕事、授業の準備とか、子どもともっとふれあうとか、そういうことをやってほしいし、そうあるべきだと思う。そのためには、保護者も当然のように学校活動に協力する姿勢に変わらなければ。それで先生も早く帰って、自分の家庭で楽しく過ごして、今日もがんばろうと学校に来て、子どもたちの前で生き生きとしてほしいと思います。

●安藤哲也 62年東京生まれ。父親の子育て・自立支援事業を展開する、NPO法人ファザーリング・ジャパン（<http://www.fathering.jp/>）代表。80年より「こぼん子育て応援団」（<http://nippon-kosodate.jp/index.html>）共同代表。内閣府や東京都子育て応援（こぼん）会議等各種会議委員。3児の父。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆巻頭の、紺野美沙子さんの活動は、豊かな日本の社会に生きる子どもたちに、海外の貧しい状況を理解させ、指導するよい教材になる。さいたま市立文蔵小学校「ブックワールド」の取り組みは、表現力はもちろん、情報発信能力育成にきわめて効果的と感動した。（埼玉県 松田温昭）◆「ブックワールド」、校内に図書館教育部を組織し、地域と一体になった取り組みがすばらしい。（北海道 助乗博美）◆「新学習指導要領における『言語活動』（府川源一郎氏）は参考になった。これからの日本の教育は「発信型」に転換していかなければならない。また、「活用」の力の育成に注目し、それに軸足を移していくということ、教科固有の目標を実現するためにも「言語活動」を取り入れるということをお忘れないう現場に広めたい。（青森県 工藤修）

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のいのちのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。